北野博美の大正時代（セクソロジスト）

――折口信夫への遥けき道程④

内海宏隆

8　末摘花輪講会【大正十二年】

再び「鳶魚日記」より《北野》の動静を伺おう。

「三月四日　北野博美氏」「四月七日　○北野博美氏来り。明日小集へ出席を求む。」「四月八日　宝生看能、北野氏方へまはる、来者十余、御本丸女中のことを話す」「四月

十一日　○北野、土屋両氏来り、十三日の長崎神社の獅子舞を誘ふ、同日午後一時北野氏宅集合の筈。」「四月十三日　午後六時北野博美宅集合、長崎神社の獅子躍りを見る、共古翁も亦た在り」「四月二十二日　午後鶴岡氏来り、挈へて北野氏宅、末摘花輪講第一会にゆき、夜帰宅。」

「末摘花輪講会」については広瀬千香が「山中笑翁片影」（『山中共古ノート』第二集）の中で語ってくれているのでここに引用する。

「関東大震災の混乱も漸く落付きを取戻さうとした頃のこと、目白鶉山の北野博美の宅で、月例、輪講会が開かれるようになった。三田村鳶魚、尾佐竹猛、山中笑の三先生を中心として、『誹風末摘花』をとりあげて、お歴々が検討を加へようといふもので（後略）」

しかし「関東大震災の混乱も漸く落付きを取戻さうとした頃」というのはどうやら千香の記憶違いのようで震災以前の四月二十二日より「末摘花輪講会」の始まっていることが「鳶魚日記」から知れる。

「五月五日　○北野博美氏府中へ往くとて立寄る、今夜は闇祭なり。」「五月九日　北野、横山二生。（中略）○北野氏より新刊につき祝賀の一会を開催せんかとて相談あり、左様の事は厭はしければ佳児社成立の祝ひ茶番を催しては如何といふ、自分のことを祝はるる、嬉しからず、殊に新刊など別に祝すべき事にはあらず。」「五月十四日　○吉野臥城氏、北野氏と挈へて来話、夜分まで閑談。」「六月三日　○末摘花第三会、林若樹氏も出席。（筆者注・第二回の記録は見つからず）」「六月十一日　○末摘花二回目筆記、鶴岡氏ヨリ請取ル。」「六月十五日　北野氏より使にて臨時に、当月尚一回輪講催度由申越、二十三日宜敷と答ふ。」「六月二十三日　○北野氏宅輪講、初めて中桐確太郎氏に逢ふ。」「七月五日　○不在中北野氏来り、菓子折一つ置いてゆく。」「七月七日　末摘花第三次筆記閲了、午後より北野宅同会に往き、右筆記を土屋氏へ渡す。」「七月二十一日　鶴岡春三郎氏来り同伴、北野氏宅輪講へ。」

「末摘花輪講会」発足経緯については広瀬千加の「山中笑翁片影」（前出）の中に詳しい。

末摘花の輪講会は、気心を知り合ったお仲間同士で…と三田村老が段取りをつけ、快諾をえた方々だった。老とは旧知の仲の、江戸研究の耆宿として、どうしても加はっていたゞかなければならなかった方が、共古、山中笑翁であった。（中略）『傍聴など入れないで、水入らずで、存分にやりませうや。』／音頭取りの三田村老の配慮から、このハイクラスの面々が定まり、目白鶉山の北野の家が会場に当てられた。（中略）／左様なわけで輪講会は持たれたが、惜しいことに永続きはしなかったばかりでなく、収められた速記録は、勿論取ってゐた筈ではあったが、今遺存するか否か、不明である。／輪講会が始まると、私は遠慮して二階へ行かなかった。北野と速記者横山流星氏と、時に俳句研究の方と伺ってゐた鶴岡春三郎氏と武藤喜邦氏（杵屋佐吉氏の弟）などが傍聴された外は、希望者はあっても、お断りしてゐた。

広瀬千香が名前を挙げた人たちの他に「鳶魚日記」の方から林若樹、中桐確太郎といった人たちの名前が拾える。八月は休会だったようで「日記」中に記載がない。そして大正十二年九月一日関東大震災が起こる。このときの様子は豊仲鍬之助が「政三・昌三・少雨荘」（『はだかの昌三　以茂随流　終刊之巻』有光書房　昭和37）の中で語っているのでこれを引用したい。

関東大震災の当日、私は斎藤と神田の勤務先の正鵠商会（万年筆商）にいた。その日、私は院展と二科展でも見て夜行列車で大阪へ帰ろうと予定していた。そこへあの大地震。店先にとまっていた自転車が独りで走りだす、とんでもない騒ぎとなってしまった。斎藤の自転車を辛うじて引ぱり出し、この自転車で本所方面の知友を見舞い、目白の北野博美兄の家に泊った。まだ広瀬のお千香さんも居られた時で、その甲府の実家から四斗俵がきているので米の心配はなかった。

しかし広瀬千香はこう反論する。「大阪の豊仲さんは、その（関東大震災の）頃の思ひ出を書いたものの中に（中略）『目白の家には、郷里から俵で米がきてゐるので、安心だつた…』といふやうなことが書かれてゐる。四十数年もたつたころ、私はそれを讀んで、あのころ、大勢ドヤドヤ集つて来た人たちは、陰でそんなデタラメな噂をしてゐたのか――と知つて、不本意な気がした。空いてる部屋を使はせることは、何とも思はないけれど云々」（「青燈社の出版」『思ひ出雑多帖』）

斎藤昌三は「少雨荘交遊録」（前出）の中でこう述べる。

震災当時彼（筆者注　北野）の家は無事だったので、いもずる仲間の豊仲その他が押しかけ厄介になった。僕も焼けだされて同じ高田町の岡本染八の家に一家移ってゐたので、往復も自然に繁くなり、借金の保証人にもなった。三田村鳶魚老や秋田雨雀翁と懇意になったのも、彼の家で時々座談会をやった賜である。

（震災そのものは《北野》に影響を及ぼさなかったようだが、その副産物としての斎藤昌三との往還が後の《北野》の人生にとって思いがけぬ影を落とすことになる。）

再び「鳶魚日記」に戻る。

「九月十七日　○鶴岡春三郎氏夜になりて来る、北野連中の消息を聞く」「九月二十三日　○先日林、山中両家を訪問せし北野博美氏は長髪なるため、南寺町の青年団員は山中翁に問訊せり、翁は彼は慥なる者、特に弁護士なりと云ひくろめられし由、同人が此方へ来らざるは不審なりと思ひ居りしが、此嫌疑の為め外出せぬやうになりしにはあらぬか。」「十月一日　雑賀博愛来話、相挈へて同氏宅に往き、転じて北野博美氏を訪ふ、大杉栄は後藤新平より毎月五百円宛を受け、御用を務め居りたるよし、共産党事件は彼の口より出たるよしなど聞く。」「十一月八日　北野博美氏来り、随筆集出版の話あり、直に整理に着手、午前より夜分まで。」「十一月十日　○来るべき約束の北野氏は見えず」

震災以降年内に末摘花輪講会が開かれた形跡はない。おかしいのは《北野》が長髪だったために南寺町の青年団員から怪しまれ、山中共古が尋問されたというエピソードである。折口信夫は震災の日、沖縄～台湾に至る採訪旅行の帰途洋上にあり無事だったが、九月四日夜横浜から徒歩で帰宅途中自警団の者に脅かされたという同じような経験をしている。

◆

さて「高崎年譜」によれば折口と北野との出会いは前年の「万葉集講座」開講のときにあったようだが、折口自身の発言は少し異なっている。

牧田　北野博美さんとはどういふ御關係があつたのですか。

柳田　民俗藝術の會でせう。

折口　私が源氏全講會をやつて居りました頃、北野さんが奥さんをつれて來られました。氣心のよい人で、ずつとつきあつてゐました。

柳田　私は中村古峡君を介して、北野君を知つた。まだ一緒に仕事した事はないがね。（註13）

ここで「源氏全講会」についてある程度説明しておいたほうがよかろう。別冊國文學「折口信夫必携」に川村晃生が書いている「源氏全講会」の項を引用する。

…大正十一年秋、折口信夫が恩師三矢重松に対して、『江戸の学者のした和学講談みたいなこと』としてすすめたことが発端となって始まった。しかし翌年七月の三矢の逝去によって一時消滅し、その後十三年一月、遺族のすすめにより折口が再興した。国学院大学では毎週日曜日の連続講義であったが、昭和三年四月、慶応義塾大学文学部教授就任に伴って、全講会を国学院から慶応に移した。（中略）公開講座としての性格が色濃いが、昭和五、六年頃の竹田鮎子の回想（「私の聴いた折口源氏」、『三田の折口信夫』昭48所収）によれば、五十人ほどの聴講生のほとんどは、慶応と国学院の学生で、古い木造校舎の一室を使っていたという。昭和十三年度～昭和十六年度の出欠控（慶応義塾大学国文学研究室に保存）をみると、毎年聴講券を発行していたことが知られ（中略）。国学院時代の講義内容は不明な点が多い（後略）。

高崎は「源氏全講会」の国学院での開講時期を「翌年（＝大正十二年）一〇月」のこととしているが、これには勘違いがあるようだ。「年譜」（全集第三十一巻）によれば大正十二年十月に折口はその年の七月に亡くなった師・三矢重松の「源氏物語講読」講義を受け継いでいる。「源氏物語講読」は「源氏全講会」のような公開講座とは違い正規の授業である。（もっとも折口の教室にはいつも学生以外の聴講者がいたそうだから厳密には正規／課外の区別をつけることはできないのかもしれないが。）「源氏全講会」の再開は前述した通り大正十三年一月のことである。それにしても「大正一一年九月、国学院大学に折口信夫の万葉集講座に開講され、翌年一〇月、源氏物語全講会開講されるや」という高崎の叙述の真意はどこにあるのか。果たして《北野》が折口の教室に最初に現れたのはいつのことなのか。左記のごとく三つ考えられる。

①大正11・9　「万葉集三十回講座」開講時。
②大正12・10　「源氏物語講読」を故・三矢重松より継承した時。
③大正13・1　「源氏物語全講会」開講時。

折口の発言があるからといって①を完全に否定することはできそうもない。「源氏全講會をやつて居りました頃」という折口の発言には曖昧なところが残っている。というのも①～③は時間的にも極めて接近しており、これら三つの事柄を一連の流れとして捉え「源氏全講會をやつて居りました頃」と表現してもおかしくはないからだ。（ひょっとすると高崎の「大正一一年九月、国学院大学に折口信夫の万葉集講座開講され、翌年一〇月、源氏物語全講会開講されるや」という表現も「そうした一連の流れの中で」くらいの意味なのかもしれない。）もし②や③だったら「源氏物語講読を三矢先生から継承した時」「源氏全講会を開講した時」という表現が妥当だろう。（もっともこの発言は「座談会」という形式でなされたものだけにある程度曖昧さが残っても仕方がないのだが。）大正十一年九月といったら高崎正秀はまだ二十代になるかならぬかであり、おまけにこの「万葉集三十回講座」を主催したのは高崎自身所属した短歌結社「白鳥社」であった。以上のことから①を高崎の記憶違いと即断してしまうことは極めて危険なように思われるのだ。ひょっとすると最初は《北野》が単身で「万葉集三十回講座」に現れ、そののち（「講読」講義か「全講会」かは兎も角として折口による）「源氏」が開講されるようになってから夫人同伴で来るようになったのかもしれない。

「昭和十三年度～昭和十六年度の出欠控」は「慶応義塾大学国文学研究室に保存」されているそうだが、大正十三年当時の国学院での「出欠控」は折口博士記念古代研究所あたりに残っているのだろうか。またそこに《北野博美・千加》の名前を確認することができるのだろうか。興味深いところである。気になるのは折口の「源氏全講会」（実は「源氏物語講読」講義）の始まったとされる「十月」以降《北野》の「鳶魚日記」への登場回数がぐっと減っていることだ。このあたり相関関係があるのかないのか全く分からないが気になるところではある。

9　三田村鳶魚専属エディター時代【大正十三年】

《北野博美》が一年間に「鳶魚日記」中へ登場する回数はおそらくこの年が最多だと思う。実に約五十回にわたって様々な形でこの年、《北野》は「鳶魚日記」の中に現れる。

「一月二十九日　○北野博美、斎藤昌三氏。（中略）○北野等は岡崎へ出席を求む、都合よき時でよろしといふ。聞置くだけにて確答せず。」「二月六日　○北野より末摘花再催の話は先月承りしが、来る十一日午後二時よりと申来る。」「二月十一日、○末摘花会にも往かず。」「二月十八日　○不在中北野博美、平音二郎。」「二月二十四日　○夜帰宅、北野氏等三人待ち居り、閑談。」「三月三日九日午後一時北野方輪講案内。」「三月四日○北野博美氏。」「三月九日　○今日も執筆。（中略）○宝生の能へも、北野の能へも往かれず。」

「一月二十九日」の「北野等は岡崎へ出席

を求む」というのはどうやらこの後二月十一日の記録から「岡崎開市四百年祭記念事務所」より依頼を受けている五月二十七日の講演への出席要請であることがわかる。《北野》はこうしたイヴェンターのような仕事もこのころからしていたのか。

広瀬千香が言うように「輪講会は…惜しいことに永続きはしなかった」ようだ。「鳶魚日記」に見てきたように「二月十一日」「三月九日」と鳶魚は会を欠席している。（「北野の能へも往かれず。」というのは前記の「宝生能」にひっかけて「輪講会」をそう呼んだものと思われる。）これより後に「輪講会」のことが「鳶魚日記」の話題として上ることはなくなる。

大正十二年「六月十一日」に鶴岡（春三郎）氏ヨリ請取」った「末摘花二回目筆記」や同年七月七日に閲了された「末摘花第三次筆記」などは広瀬千香のいう「収められた速記録」の一部なのだろう。これらは行方知れずのままなのだろうか。

「四月十五日　（前略）北野博美氏を訪ふ、不在ゆゑ申置く。」「四月十六日　河竹繁俊氏、北野博美氏。」「四月十九日　○北野氏より京都との打合せ済みたるよし話あり、直に出発準備。」「四月二十六日　○北野博美氏。」「五月十一日　宝生見物に出掛け、未だ停車場へ途中にて北野氏追駆け来る、出版物の用事也　同道崇文堂に往く、（中略）北野氏明日来談の事。」「五月十三日　○北野博美氏来る、幸に応援を頼み、半分だけ夜になりて返送。」「五月十四日　北野氏、中村古峡氏同道、来十七日自宅談話会へ出席求む、林氏へも同様との事なり、車人形のことあれば明答なりがたきよし申聞ける。」「五月十五日　北野博美氏同道にて、恵風館主人鈴木恵」といふ人来る、娯楽の江戸出版の事を定む、是は先度の震災にて崇文堂が刷本を焼せしめたる分なり、北野氏崇文堂へ断り、又原稿取纏めとも担当す。」「五月十七日　○招かれたる品川の変体（ママ）心理談話会へも往かず。」「五月十九日　○北野氏に往き、原稿整理のことを頼む。」「五月二十日　○夜北野氏写しもの持ちて、雨を冒して来る。」「五月二十四日　○写しもののことにつき北野氏へ八重を遣す、岡崎より依頼ありたるよし、或は辞し難きかと思ひ、今夜勉めて講草を作る、明日午後北野氏来たるべしといふ。」「五月二十五日　○北野氏。」「五月二十七日　○不在中北野氏来る。」「五月三十日　夜になりて北野博美氏。」

「五月十四日」の記録を見ると《北野》と「變態心理」との縁は切れていなかったことがわかる。《北野》と鳶魚との関係の密なることを知った中村古峡が變態心理談話会への出席要請のために現れたようである。（「十七日」の記載より結局鳶魚は談話会へは出席しなかったことがわかる。）

また「五月十五日」の項を見ると《北野》は出版コーディネーターのような仕事をしていることがわかる。関東大震災の影響で刷本を焼失してしまった崇文堂になりかわって、別の出版社（恵風館）から本にしようと、その許可を得に著者の鳶魚のところに出版社主人を連れて訪れている。おそらく《北野》は出版業界関係者の間を立ちまわりいくらかの斡旋料・手間賃をとっていたのではあるまい

か。「性之研究」なきあとの《北野》の動向を少し知ることができる。

「六月七日　○夜分北野氏来り、娯楽の江戸の原稿を整理す。」「六月八日　○夜北野氏原稿整理の手伝に来る。」「六月九日　○北野氏来り、原稿整理片付く。」「六月十四日　○増上寺講堂の車人形公演に往く、北野氏と相挈へて帰宅。」「七月二日　○北野博美氏写真手同伴にて来る。」「七月七日　○北野氏、小咄十種持参返済。」「七月八日　○北野氏来る、口授筆記。」「七月十三日　○今日は斎藤竜太郎氏新小説の原稿を取りに来る筈なれば、勉めて北野氏に口授したる筆記を加朱す、然れども来らず。」

ここで注目したいのは「七月八日」の項である。《北野》にとって口述筆記の相手は折口が最初ではなかった。また「六月八日」の項より鳶魚の「原稿整理の手伝」など煩雑で地味な下請け仕事を引き受けていることがわかる。折口の原稿製作はそれはそれは入念なものであり印刷屋泣かせだったと聞くからこうした下請け仕事を一手に引き受けてくれる《北野》のような人物は後の折口からも重宝がられたに違いない。

「七月二十一日　○北野氏へ往へ、お江戸の話を贈る。」「七月二十二日　○北野氏来るべくして来らず。」「七月二十五日　○夜北野氏来る、長坂より依頼の広告文と初校とを頼む。」「七月二十六日　○口授の準備は済したけれど北野氏来らず。」「八月三日　○北野氏写し物持参、校正を頼む。」「八月二十九日　鶴岡、北野両氏来りカアド調製。」「八月三十日　○鶴岡、北野両氏カアド調製。」「八月三十一日　○北野氏来りカアド調製、夕刻までに終了（以下略）。」「九月三日　○夜北野博美氏。」「九月十三日　○鈴木一意氏、北野博美氏共に新刊一冊づつ進上。」「九月二十五日　北野氏来り、大野氏へ往き、門人二人を誘ひ博物館の伊藤赳氏を訪ふ、一向埒があかず、（中略）八重と三人にて吉田書店にゆき（中略）蓬莱館の女義太夫に驚き退散す（以下略）」

《北野》はこの年、おそらく鳶魚の執筆活動にかかわるあらゆるサポートをしていたのではあるまいか。しいて譬えるならばこの頃の《北野》は三田村鳶魚専属の有能なマネージャーでありエディターであったといえそうだ。

「九月二十六日　○（前略）北野氏は急に甲州に往くとて来る。」「九月二十九日　○冒雨博物館に往く、大野氏門生三人先づ在り、北野君又来る、それぞれ写させて来週再訪を約して退出（以下略）」「十月一日　○鉄樹居士、北野博美氏。」「十月三日　○北野博美氏来り、同伴、工業倶楽部の清明会講演に往く、国民新聞の案内に拠る。○北野氏に頼みたる図書館優待券書換相済む。」「十月十一日　○帰宅の道にて北野氏に逢ふ。」「十月十二日　北野博美氏。」「十月十三日　八重を北野氏方へ遣し、方々へ通知方を頼む。」「十月十八日　○今朝北野妻女。」「十月三十日　北野妻女子供つれて来る。」「十一月十二日　○北野妻女、夜になりて松村大作。」「十一月二十日　○夜、北野博美

氏。」「十一月二一日　夜北野博美氏。」「十一月二六日　○北野博美氏。」

《北野博美》と妻・千香はこの翌年離婚することになるのだが、「鳶魚日記」の中にもその兆しを読み取ることはできる。「九月二十六日」の項で、急に妻の実家のある「甲州」に行く《北野》の姿や、「十月十八日」「三十日」「十一月十二日」と三度にわたって鳶魚を訪ねる妻・千香の姿。鳶魚はただ彼ら夫婦の別々の来訪の事実を記すのみ。「日記」の行間から浮かんでくるのは一夫婦の破局へと向かう姿である。

◆

「鳶魚日記」より伺えること以外に（前述したことだが）《北野》は斎藤昌三とこの年「新性」なる雑誌を創刊している。この雑誌は東大明治新聞雑誌文庫が第一巻第一号のみを所蔵している。大正十三年一月一日発行の創刊号の奥付を見ると「大正十三年は新生の年である。大正十二年の後半を『破壊より復興への半歳』として送つた人であるならばここに新らしく來たらんとする年こそ『新生』の第一年として迎ふべきである。」「▲『新生』は『新性』である。（中略）本誌創刊の意義はそれだけでも十分明瞭であらうと思はれる。」「此種の雑誌は――すべての點に於て到底比較にはならぬが――既に二三種はあつたと見られる。しかし本誌はそれらの何れのものよりもヨリ優れたものたらしめようとの抱負をもつてゐることを信じて下さい。創刊に際し特にこれだけのことをお願ひ致して置きます。」などの言葉が並ぶが「性之研究」の「會設立趣意書」に見てきたような勢いは既に感じられない。「編輯兼發行印刷人」は《井田貞》、「發行所」は《新性社》、發行所の住所は「東京市外高田町高田一四九六番地」となっている。「井田貞」なる人物については未詳。「同人語」の中で「幸い井田君の主唱もあり」（昌三）「本誌のやうな雑誌を創刊しようぢやないかとEさんから話のあつたのは、あの大地震があつて後間もなく、夜警小屋内でゞあつた」（H）とされていることから「新性」創刊にあたってのリーダー的存在だったのだろう。「性之研究」で妻・千加を「編輯兼發行人」にして一度痛い目にあっているので回避手段として別人を立てたとも考えられる。《新性社》は「代理部」なる部門をもって「メンソーレタム、防臭剤ビロシン、獨逸製フリーデ萬年筆、原稿用紙（姓名入り）、新古書籍取次」などを行っていたことが宣伝頁から伺える。中でもユニークなのは「富士絹製綿工場」が「製造元」の「專賣特許の眞綿フトン」の発売元となっていることである。妻・千加の甲府の実家が何らかのかたちでこの《新性社》という新事業にかかわりをもっていたと推察される。いずれにしても出版部門での赤字を副業の利潤で埋め合わせようといったある種の「経営方針」が伝わってくる部分ではある。發行所住所は、大正十年五月よりの《北野》の転居先である。（『性之研究』第三巻第二号・大正十年六月号に會事務所・編輯部・自宅の「移轉御通知」が掲載されている。）

「新性」創刊号の「目次」を見てみよう。

性と道　　東洋大学教授　中島徳蔵
（中略）
新東京と性愛問題

早稲田大学教授　安部磯雄
戀愛の反逆的要素
民衆娯樂と性的刺戟　秋田雨雀
近代文學に描かれた女と性の問題　權田保之助
馬場孤蝶
兩性の本質的差別に徹底せよ
帝國大學教授醫學博士　杉田直樹
人間性に逆行すべき女性
成女高女教授　宮田修
男子の横暴に處する婦人の道　高島米峰
（中略）
性慾と温浴との關係
早稲田大学教授　中桐確太郎
少女發情期の研究　キッシュ博士
性缺陥病者の精神生活　ヴェッキ博士
（中略）
監獄に代用した遊郭　三田村鳶魚
古典時代の同性愛　澤田四郎作
（中略）
民族資料としての性祭典　斎藤昌三
女泣石と女形石　放江庵主人
性的文化史資料　今小路重夫
性心理から見た遊野郎　薄權太郎
五色に彩られた女の戀　田中純一郎
暗闇内の享樂
地震が生んだ戀の悲劇　山路淳六
（後略）

この他に《文藝》として瓔子「愛寵の囚人」ダンヌンツィオ「接吻」の二編、《北野博美》のものとしては「戀愛革命の第一聲」「性的暴力の心理解剖」「手淫の眼に及ぼす影響」「舊約時代の賣娼婦」の四編がある。「性之研究」時代にみられた《北野》の個人雑誌色は大方払拭された観がある。

このように「性之研究」の二の足を踏まないように背水の陣で「新性」及び「新性社」は出発したはずだったが、その後については不詳である。大正十三年（特に下半期）の「鳶魚日記」における《北野》の「外働きの量」を考えると、おそらく雑誌「新性」はまもなく廃刊に追い込まれたのではあるまいかと類推される。（追記　後日北野晃氏より第二号《大正十三年二月十五日發行　傍らにゴム印で「大正拾參年參月拾六日」とあり》を送っていただいた。）

この雑誌は「郷土趣味」（大正十三年一月号）「編輯餘録」が伝えるように斎藤昌三と北野博美とのコラボレーションである。「同人語」の中で斎藤昌三自身こう語る。「北野君から『新性』創刊の話はあつたが一所にやつてくれといふ話は十二月一日の朝、それから印刷の方を引うけて、四日には（筆者注東京では印刷が間に合わないため）福島へ旅立つたのであつた。」斎藤昌三については今まで何度も時代の一証言者として本稿に登場してもらっているが一度としてきちんと紹介することがなかった。ここで「日本人名事典」より斎藤昌三の項を引く。

さいとうしょうぞう　斎藤昌三　一八八七―一九六一　書誌研究家、随筆家。本名政三。大正十二年（一九二三）の関東大震災を期にこれまでの筆名昌三に改めた。俳号桃哉。没するまで居住の茅ヶ崎にちなみ湘雨荘、少雨叟とも号した。明治二十年三月十九日神奈川県座間市に生る。若くして横浜の原合名、ついで東京神田で貿易商を営んだ経験は昭和六年（一九三一）以降、限定版を主とした独特

な出版社である書物展望社の経営に発揮された。明治末期から俳句、文芸同人誌に親しむかたわら、発禁本や多角的な文献蒐集によって専門家間にも知られ、『明治文化全集』『現代日本文学全集』等への参画のほか、文芸関係書誌編纂の先駆的労作が多い。そのほか蔵書票趣味の紹介に尽力、晩年には古川柳や近世庶民文芸の紹介普及にもつとめた。昭和三十六年十一月二十六日病没。（稲村徹元）

《北野博美》と斎藤昌三との出会いはいつのことだったのか。斎藤昌三が「性之研究」に初めて寄稿したのは大正十年五月号（第三巻第一号）のことである。「性神行脚」を次の第二号と二回にわけて載せたのち、第四号には「信濃の男石祠」を掲載している。「僕が盛んに各地の性神行脚をしてゐた頃、高田馬場辺で『性の研究』を出してゐたのは北野夫妻だった。」（斎藤昌三「少雨叟交遊録」）とあることから二人の出会いはだいたいこの時期と考えてよかろう。前出した通り大震災で焼け出された斎藤が《北野》と同じ高田町内にあった岡本染八宅に身を寄せたことから「往復も自然に繁くな」ったという。「借金の保証人にもなった」とあるが、具体的にどんな借金をしたのか明らかではないがひょっとするとこの「新性社」がらみのことだったのかもしれない。斎藤昌三の周辺の人の言葉からすると《北野》の妻・千加は「北野と別れて昌三の書物展望社を手伝つたり昌三と親しくなつた」とのことである。（千香自身「私が神田に住んでゐたころ、つまり昭和六年頃、私が書物展望の仕事をしてゐた時分」（「山中共古ノート第一集」五ページ）と斎藤昌三との関係（書物展望の仕事）について記している。）俗に金銭や女性問題の拗れでパートナーシップが崩れるというのは世の常であることを考えると「新性」が短命に終わっただろう理由もなんとなく分かるような気がする。

「36人の好色家」は《北野》をこう評し伝えている。

彼には前記の雑誌（筆者注「性之研究」の関係で、尾佐竹博士を始め三田村鳶魚、冲野岩三郎、武田祐吉博士、秋田雨雀など折角い い知己をもち、自宅で「末摘花輪講」を続けたことなどもありながら、どれもこれも大成せず、誌面も発展せずに了つたのは、彼の修業の不足に由来するものと見て、同情の念を禁じ得ない。

ここでわれわれは一人の奇異な名前を発見する。それは折口信夫とは大阪・天王寺中学以来の親友である「武田祐吉博士」の名前である。武田祐吉と《北野》との関係は今のところ何もわかっていないが、ひょっとすると《北野》は武田祐吉を介して折口の存在を知るようになったのかも知れぬ。（しかし武田と折口とを混同しているような節も見られないではない。「少雨荘交遊録」の方では「晩年は釈超空門下として民俗研究に凝り」なる一文を草している。「晩年…門下として」という箇所に斎藤の認識不足で露呈しているし（印刷屋の誤植かも知れぬが）「迢空」と書くべきところ「超空」と誤記が見られる。またこの著述の後半で斎藤は《北野》の没年を誤って記載している。以上のことよりこの文献の取り扱いについては慎重を期したい。）

壷から初まる御講義を聞く人たちで、私は『湖月抄』を持って行った。左手の入り口から、和服に袴、草履ばき、といふいでたちの折口先生は、風呂敷に包んだ書物を、軽く抱えては入って来られた。私が先生に接した一番初めの印象であるが、小柄で、静かな雰囲気をもつ人柄と思った。

本文の朗読がはじまる。この古典文は、滑らかな丸みのある関西調で、さら〳〵と、湧き水の流れ出るように、静粛な室内に広がった。おゝん時…おゝん後見…といふお声が、一ト際強く響き渡る。

早稲田大学の坪内逍遥博士の、セクスピアの名調子は、話に聞いてゐるだけであるが、王朝文学の朗読にかけては、先生のは逸品といってよいのではあるまいか。つかぬ事のようだが、歌舞伎などで上演される王朝もの、という幕を、私はいゝとは思へない。われれが、この文学によせる夢幻の世界は消えてゐる。勿論比較すべきではあるまいと知りながらも、舞台のきわ〳〵しさが気になる。それは、かつての日、耳朶に触れたあの朗読が、耳の底にあるせいかも知れない。

ある日、聴講の女性だけのお茶の会が、同じ学院内の小室で催されて出席した。その席で、杉浦非水画伯の奥様翠子女史を、折口先生は顧みられて、

『杉浦さんは、ご主人が非水で、奥さまが翠子さんですが、そのどちらも翡翠（かはせみ）のことですね。』

と、微笑していはれた。

女性二十人ほどの人数だったが、『短冊をさしあげませうか―。』と、書生さんの少年をお宅に走らせて持参した枚数を、少ないから、くじ引きにして下さい、と云はれ、くじを引いた。幸運には恵まれない私が、どうしたことか、当りで、渋い枯草色の短冊をいたゞいて帰った。

昭和四年五月発行、改造文庫第二部第五十九篇　釈迢空著自選歌集『海やまのあひだ』に、納められてゐることを探し当てた。

友なしに遊ぶ子どもが　うちむかふ
山もちゝはゝも　みなもだしたり

右は、大正十二年三十首のうちであった。

（以下略）

註

13「民俗學の過去と將來　座談會（上）」『民間伝承』昭和24・1

付記

北野晃氏より一通の封筒が届けられた。（平成八年一一月一〇日消印）中には「広瀬千香の筐底にしまわれていた、未発表草稿の一つですが、お手元まで」と書かれた便箋と「折口先生の思ひ出―明日香の故地」と題されたコクヨ製A4版四百字詰原稿用紙五枚（「42・12・20」「43・2・15」二つの日付あり。）のコピーが同封されていた。北野晃氏のご厚意により茲に公開させていただく。

渋谷駅と恵比寿駅の間の、並木橋の停留所近くから左へはいり、その右側に国学院はある。もう古い〳〵昔の話である。学院の何号室か忘れたが、広いお粗末な教室は、殆んど学生で占められてゐる中に、いくらかの学外の人々も交じってゐた。歌人の杉浦翠子女史や、若き日の小島政二郎氏夫妻もゐられた筈だつた。折口信夫先生の、源氏物語全講、桐

本来「同伴聴講」しているはずの夫君・《北野博美》が全く文章に登場しないのを不思議に感じられる方もおられよう。しかし離婚後前夫・《北野博美》を仇敵のように憎んでいたという広瀬千香のこと、こうした割り切った書き方をしたところでおかしいことはない。事実広瀬はその著書「山中共古ノート」や「思ひ出雑記帖」などの中に様々な昔語りを残してくれたが、その中に《北野》が登場することは至極稀なことなのである。というよりも北野を極力排除したところで思い出を完結させようという意図が明らかにある。

冒頭の「もう古い〳〵昔の話」という叙述から時期を限定することはできないが「折口信夫先生の、源氏物語全講、桐壷から初まる御講義」という言葉より広瀬千香が「先生に接した一番初め」は大正十三年一月より始まる「源氏全講会」のときであったといえそうだ。

しかし「高崎年譜」の第五項「大正一一年九月、国学院大学に折口信夫の万葉集講座開講され、翌年一〇月、源氏物語全講会開講されるや、常に夫人同伴聴講。」は問題点を残す。広瀬のいう通り「源氏物語全講会」のスタート時点で《北野》が折口の教室に初めて現れたとしたら前半部分「大正一一年九月、国学院大学に折口信夫の万葉集講座開講され」という叙述の必要性は全くなかったわけである。「国学院時代の講義内容は不明な点が多い」そうだから高崎ら当事者しか知らぬ事情があったのかもしれない。（もし仮に「万葉集三十回講座」「源氏物語講読」「源氏全講会」の三つの講義・講座に何らかの関連性や係わりがあったとしたらどうだろう。）

広瀬がくじ引きで短冊の当たった「ある日」とは大正十三年六月以降のことであったと想定される。「短冊」を「書生さんの少年をお宅に走らせて持参した」という叙述から、折口の住居は国学院にほど近いところにあったと推定できる。それは「年譜」より大正十三年六月よりの転居先「渋谷町羽沢一八九番地」であったと考えられる。（大正十一年～二年のことは定かではないが）北野夫妻は大正十三年の「源氏全講会」には確実に出席していたのだった。